袁枚『子不語』の增補

中野　清

一、はじめに（袁枚評價の概觀）

十八世紀の中國、清朝の乾隆という時代に、所謂「文壇」が果たして存在し得たかどうかはしばらく措いても、當時の文人・學者のうちに、袁枚の存在を默殺することができた者はほとんどいないと言えるのではなかろうか。

「毀」も「貶」も、「譽」も「褒」も、ともに大量に殘されているのである。

その袁枚に對する「毀譽褒貶」は、大きく三つの時代に區分して、その變化を整理することができる。

まず章學誠の『書坊刻詩話後』[1]に代表される同時代人による「惡罵嘲笑」であるが、つまるところ「女弟子」の存在が、謹嚴なる禮教徒の機嫌を損ねたという點と、「性情の自由な發露」を「無格律」「放恣」「淺薄」と決めつけたいうに過ぎず、感情的・生理的レベルのものが多く、批評としては論ずるに値するものは見られない。清末の梁啓超に至るまで、同じ傾向のものは多い。

一方で、袁枚の後援者・友人などによる好意的な忠告ないし揶揄なども多い。[2]例えば、

聞汝宰江寧有善政、誠不負所言。惜杜牧之未免風流耳。
汝江寧を宰して善政有り、誠に言ふ所に負かずと聞く。
惜むらくは杜牧之未だ風流を免れざるのみ。

「五四文學革命」以後の評論には、かえってほとんど「女弟子」の存在に觸れたものは見られなくなり、「性情の解放」という觀點から、その「性靈說」を評價するものが多い。どうにも評價しにくい「女弟子」の存在に、なるべく觸れまい

としているかの如くである。

例えば、近代の詩人朱自清[3]は、「文壇革命家」という言葉を用いて、

清代袁枚也算得一個文壇革命家、論詩也以性靈爲主。到了他才將「詩言志」的意義又擴展了一步、差不離和陸機的「詩緣情」併爲一談。

清代の袁枚もまた一人の文壇革命家に數えることができよう。性情を主にして詩を論じている。彼に至って「詩は志を言う」という言葉の意味をまた一歩ひろげることができ、陸機の「詩は情に緣る」とほとんど同じ意味のものとしている。

と說いている。

そして、「改革開放」後になると、

直到袁枚出來、清代詩歌才眞正走出了自己的道路、獲得了徹底的解放。[4]

袁枚以招收女弟子的形式大量培養女詩人、事實上也正是這股時代潮流的突出表現之一。它不但在文學史上、而且在婦女文化史以及教育史上、無疑都具有十分重大的意義。[5]

袁枚の出現にいたって、清代の詩歌ははじめて自分の道を正しく歩み出すことができ、徹底的解放をかちえたのである。

袁枚は女弟子を集めるという形で、大量に女詩人を育てた。事實この時代の潮流の尖鋭な現れのひとつである。そしてそれは文學史の上だけではなく、婦女文化史及び婦女教育史上に、ともに疑いなくたいへん重大な意味を持っているのである。

と、「女弟子」の存在を、「婦女文化史・教育史」上に位置づけて積極的に評價するものまで現れてくるのである。評價とは、まさに郭沫若の說く如く「時代所賜[6]」なのである。

二、版本の問題

袁枚のまさに「等身」というほかはない著作のうち、『小倉山房詩集』・『隨園詩話』・『新齊諧（子不語）』等は、いったん原刊本が上梓されたあとも、なお書き繼がれた部分があるようである。原刊本（所謂『二十八種』）よりも袁の沒後、弟子や遺族によってまとめられたものであろう私家版の全集『隨園三十種』のほうが、卷數が增加しているものが多いのである。

ここでは、『小倉山房詩集』・『隨園詩話』に關してはひとまず措いて、『新齊諧（子不語）・續新齊諧』の增補について

検討することとする。

一般に小説の版本研究は、白話小説の場合には孫楷第・鹽谷温以後の研究調査の蓄積があるが、文言小説、特に『聊齋志異』以外の清の志怪小説の版本研究は、まだ始まってもいないというのが現状なのである。

以下、拙譯本[7]の解説と一部重複するが、『新齊諧（子不語）・續新齊諧』のテキストについて、概説する。

木版線装本には以下の四種がある。

①原刊本（隨園二十八種）

『新齊諧二十四卷』乾隆五十三年（一七八八）刻。封面中央に「新齊諧」、右上に「乾隆戊申」、右下に「翻刻必究」、左下に「隨園藏版」。

縦二五〇ミリ、横一五八ミリ。毎半葉匡郭縦一六四ミリ、横一二三ミリ、十一行行二十一字、白口左右雙邊有界。

序、目錄各一葉は版心魚尾上に「新齊諧」。本文卷頭は「新齊諧第幾卷、隨園戲編」とあるが、版心魚尾上には「子不語」、魚尾下に卷數丁數。目錄は卷幾計幾則とあるのみ。

『續新齊諧八卷』　封面中央に「續新齊諧」、左下に「隨園藏版」、目錄無し。

本文卷頭は、一～四卷は「續新齊諧第一、隨園戲編」～「續新齊諧第四、隨園戲編」、五卷は「續新齊諧第五卷、隨園戲編」、六卷は「續新齊諧卷六、隨園戲編」、七～八卷は「續新齊諧第七卷、隨園戲編」「續新齊諧第八卷、隨園戲編」と、統一を缺く。版心魚尾上には「續新齊諧」、魚尾下に卷數丁數。

②『隨園三十種』　正編二十四卷、續編十卷。封面中央に「新齊諧」、左下に「隨園藏版」とあり。縦一七一ミリ、横一一五ミリ、毎半葉匡郭縦一三四ミリ、横一〇五ミリ、十行行二十一字、黑口左右雙邊有界。魚尾無し。序一葉は版心に新齊諧、目錄二十一葉は版心に「子不語」。本文卷頭は新齊諧第幾卷、隨園戲編とあるが、版心には「子不語」、下に卷數丁數。目錄は全て題名を記す。この版は『續修四庫全書』に影印されている。

③美德堂刊本　嘉慶二十年（一八一五）。國立國會圖書館藏の、封面に『新齊諧』とあるだけの無刊記本がこれであろう。版形はほぼ『隨園三十種』と同じ（縦十七一ミリ、横一一五ミリ）である。

④同治三年三讓睦氏の刊行に係る『三十種』の復刻本があるというも未見。

線装本であるが、石印・排印のものは、

⑤『隨園三十八種』勤裕堂排印。光緒十八年（一八九二）。

⑥『隨園三十六種』上海圖書集成書局。光緒十八年（一八九二）。

⑦『隨園三十八種』上海鴻文書局石印。宣統二年（一九一〇）。

⑧『隨園全集』文明書局石印。一九一八年。同じ版が『清代筆記小說叢刊』というシリーズ名でも發賣されている。

⑨『隨園四十三種』上海掃葉山房石印。一九一八年。

⑩『詳註子不語』上海會文堂書局石印。桃源山人註。一九二四年。民國第弐甲子年孟秋上海會文堂書局印行

⑪『筆記小說大觀』本　進步書局排印。一九二〇年代であろう。江蘇廣陵古籍刻印社の影印本がある。

⑫『袁枚全集』　上海校經山房成記書局排印。一九二七年。

以上、全て『隨園三十種』本に據っている。

洋装活字本は數多いが、近年のものは簡體字を使ったものもあり、縱組みのものも横組みのものもある。校訂が杜撰なもの、使用底本を明記していないものも多いが、その中で學術的に信頼できるものは、

⑬申孟選注「子不語選注」文化藝術出版社、一九八八年十二月。簡體字横組み。『新齊諧・續新齊諧』から百八話を選び注釋を施したもの。

⑭文言小說『子不語』嶽麓書社、一九八五年十一月。『新齊諧』のみ。簡體字横組み。

⑮『子不語』上海古籍出版社、一九八六年十一月。『新齊諧・續新齊諧』。簡體字縱組み。この書だけが、解說で『原刊本』と『三十種』本以降の通行本の異同に觸れている。

⑯『子不語全集』河北人民出版社、一九八七年七月。『新齊諧・續新齊諧』。簡體字横組み。

⑰古曄等譯『子不語』　國際廣播出版社、九九二年十一月。『新齊諧』のみ。簡體字横組みだが、原文と現代中國語譯對照である。『新齊諧』のみとはいえ全譯でかなりな勞作である。

⑱『袁枚全集第四卷』江蘇古籍出版社、一九九三年九月。『新齊諧・續新齊諧』。繁體字縱組み。

①の原刊本『新齊諧二十四卷・續新齊諧八卷（隨園二十八種）』は、『全國漢籍データベース』[8]によると、新潟大、二松學舍、公文書館、東洋文庫等に所藏されているようである。

現在筆者の手元にあるものは、『櫻山文庫』舊藏本、『新齊

諧二十四卷』六冊・『續新齊諧八卷』二冊。

この原刊本の目錄は第一葉第一行に『新齊諧目錄』、第二行から「卷一計二十九則」、「卷二計三十三則」と、第一葉の最後が「卷二十一計四十九則」、版心は『新齊諧』、魚尾下に目錄。第二葉は三行で終わり、版心は無し。

要するに、「第何卷には何話收錄されている」ということを記しているに過ぎないのである。そしてこの「計幾則」が非常に不正確なのである。

②と③の目錄は、各卷ごとに題名まで記しており、卷二十三、二十四には兩版ともに續增と付記がある。原刊本より話數が增えているし、『續新齊諧』も二卷增えて十卷になっている。だから②は目錄だけで、『新齊諧』で二十葉、『續新齊諧』で八葉という分量になっている。

三、問題の所在

原本『隨園二十八種』そのものが、既に稀覯本に屬する爲であろう、この『二十八種本新齊諧』から『三十種本新齊諧』への「續增」の問題、及び『續新齊諧』の「二卷增補」について論究しているものはわずかに⑮のみである。⑮に、

原本『新齊諧』二十四卷、署乾隆戊申（五十三年）刻、續僅八卷、較它本少二卷。該本卷二十三・二十四似乎已經增補改編、非戊申原刻、如卷二十三『十三猫同日殉節』篇已記乾隆己酉（五十四年）事、而卷二十三總目標三十四則、實有四十二則（較它本仍少十四則）、卷二十四總目標五十三則、實止四十三則（它本同）、（以下略）[9]

原本『新齊諧』二十四卷は、乾隆戊申（五十三年）刻と記してある。續（新齊諧・筆者）は僅かに八卷であり、他の版本と較べて二卷少ない。この本（『三十種本』・筆者）の二十三・二十四卷はすでに增補改編されていて、戊申の原刻とは違う。例えば卷二十三の『十三猫同日殉節』にはすでに乾隆己酉（五十四年）の事と記してある、そして卷二十三は總目に三十四則とあるが、實は四十二則ある（他の版本より十四則少ない）[10]。卷二十四は總目に五十三則とあるが、實は四十三則に止まっている（他の版本と同じ）。

『隨園二十八種本新齊諧』の目錄と、實際の收錄話數のずれは、このままではわかりにくいので整理すると、

卷二十三

原本總目三十四則　原本話數四十二則　三十種話數五十四則

卷二十四

原本總目五十三則　原本話數四十三則　三十種話數四十三則

ということになる。だから、『三十種本』の目録に卷二十三・卷二十四ともに「續增」とあるのはおかしいのである。「續增」は卷二十三だけで、十二則にすぎないし、この十二則中に、乾隆五十三年以後と思われる話はない。

この「續增」の結果、『三十種本』第二十三卷は、葉數が三十三葉と不自然に多くなっている。[11] 概して『三十種本』は誤刻も多く、版形も小さく「普及版全集」という感がある。

そして『十三猫同日殉節』の問題である。『十三猫同日殉節』は、この「續增」の部分ではなく、『原本』にも收錄されているのである。

原本は乾隆戊申（五十三年）刻である。そこに己酉（五十四年）のできごとが記載されている。ということは、

A　乾隆戊申（五十三年）刻が、事實に反する。

B　原本六冊全てが、乾隆戊申に出たわけではない。

のいずれかしか考えられないのである。

四、結論

見示『子不語』首本、已全行閱訖。[12]

示さるる『子不語』の首本、已に全て行閲し訖る。

楊潮觀から袁枚に宛てた、抗議の手紙の書き出しの部分である。この部分にあるヒントが隠れているようだ。

楊が抗議しているのは、卷四に收錄されている『李香君薦卷』の內容に關してである。もちろん『原本新齊諧（二十八種本）』である。

ここで言うの「首本」とは、普通に考えて「第一冊目」ということであろう。『原本新齊諧二十四卷』は、前述の如く全六冊である。改裝の可能性はないであろう。というのはまったく同じ版式の『隨園食單』・『隨園隨筆』も手元にあり、それぞれ一冊の葉數に大差が見られず、表紙の紙質も同じだからである。

普通に考えて、六冊全てが上梓されたあとに、第一冊だけを友人に贈るとは思えない。だからこの時點で、楊潮觀のもとに贈られたのは、第一冊（卷四まで）だけであるはずだ。本文が上梓された後で、「元人の說部に雷同するもの有るを見て、乃ち改めて新齊諧と爲す」[13]、と有るように、『序』を書き直し、『目錄』を付して戊申（五十三年）にまにあうように刊行されたのであろう。

そのため、『序』と『目錄』のみは、版心が『新齊諧』になっているのである。そしてこの『目錄』は相當急いで作成

されたもののようで、巻一から巻四までは、『目錄』の「計幾則」という記述と本文の「則數」が合っているが、巻五からはもう合わなくなっているのである。これも第一冊だけがまず刊行されたという根據になるはずだ。そして『目錄』の第二葉には版心も無いということも「急い」で作成されたことの傍證になるのではなかろうか。

『原本新齊諧二四卷』六冊は、同時に刊行されたわけではない。第一冊がまず戊申（五十三年）にまにあうように刊行され、乾隆五十四年のことと記されている『十三猫同日殉節』を含む、殘りの五冊は、たぶん同時にではなく、順を追って、遅くとも五十六年には刊行を終えていたと考えられる。

そしてこのときになんらかの理由で上梓されずに、殘った原稿が、『三十種本』刊行の時點で、十二則だけ第二十三卷に「增續」されたと見てよいのではなかろうか。

『續新齊諧』の成立時期については、アーサー・ウェイリーと前野直彬が、

續集の『續子不語』は、一七九六年ごろに刊行されている。[14]

袁枚には『續新齊諧』十卷という著書もある。完成の年代はわからないが、「灤陽消夏錄」を見て書いた明白な痕跡があり、たぶん袁枚の最晩年まで書き續けられていたものと思われる。[15]

『續新齊諧』は完成の時期を明らかにしない。書中の記事は乾隆五十七年六月に止まっているから、おそらくそれより少し後、袁枚の死ぬ少し前に完成したわけであろう。[16]

と記しているが、以上の論は、前提に誤りがあるのである。ウェイリーが使用したテキストは、⑧である。[17]⑧の『續新齊諧』は、『三十種』にもとづいた十卷本である。

前野氏は、『二十八種本（原本）』と『三十種本』を校合して翻譯のテキストに用いた、と記しているが、[18]第二十三卷の「續增」に氣づいていない（「續增」部分からの譯はないが）し、『續新齊諧』の『八卷本』と『十卷本』の問題に氣づいていない。

要するに、ともに『續新齊諧八卷本』を見ず、あるいは見ても意識せずに『續新齊諧十卷本』だけで、刊行の時期を單に袁枚の死の直前と推定しているだけなのである。

袁枚が世を去ったのは、嘉慶二年十一月十七日（西暦では1798年1月3日）である。『新齊諧二十四卷』が刊行された後は、もう最晩年である。1796年という可能性も排除

しきれない。しかし決定的なのは、その時に出版されたのは『八卷本』であるということだ。

『續新齊諧』第八卷の最後に收錄されている、『皖城雷異』は、「乾隆五十六年八月初一日午刻有黑雲」という書き出しで始まる。このように何年の出來事であったかを、書き出しにもってくるというのは、『新齊諧・續新齊諧』を通じてほとんど見られないものである。明らかに、最後の卷の最後の一則にふさわしい書き出しなのだ。

そしてなお細かく見ていくと、『十卷本（三十種本）續新齊諧』の『皖城雷異』の刻されている第十九葉の末尾に、「續新齊諧第八終」と有るのである。

卷一から卷七までの最後の葉の最終行は、全て「續新齊諧第一」「續新齊諧第幾」であり「終」の文字はなく、卷九・卷十については最後の葉の最終行には、何も刻していないのである。

これは明らかに、第八卷までで本來の「續新齊諧」は終わっていることを、『十卷本（三十種本）』の編者が知っていて、それをどこかに記錄しようとした苦心の現れと見るべきであろう。

以上、綜合して言えることは、『原本新齊諧』は乾隆戊申（五十三年）に第一冊が刊行され、第六冊までそろうのは五十六年頃。『原本續新齊諧八卷本（二十八種本）』の刊行は、すこし幅を持たせても乾隆五十八年（1793年）から五十九年（1794年）まであろう。

確かに袁枚は『續新齊諧』刊行後も、死の直前まで「怪異の談」を書き續けていた。その殘された原稿が『三十種本』刊行の段階で、『第九卷・第十卷』として增補されたのである。二卷ぶんの原稿の量の多さから考えて、『原本續新齊諧八卷』は、それほど死の直前の刊行とは考えられないのである。

そして、詳しいことについては稿を改めるが、『三十種本』の刊行は、從來多くの「書目」に、「乾隆嘉慶之間」とあるが、嘉慶の後半にまで時代が下がるのではないかと思えるふしもあるのである。

〔注〕

（1）『章氏遺書』、『章學誠遺書』文物出版社影印、1985年7月。45～46頁

（2）『文淵閣大學士史文靖公神道碑』、『小倉山房文集』卷三。王英志主編『袁枚全集』江蘇古籍出版社、1993年9月。第二卷、40頁

（3）朱自清『詩言志辨』、『朱自清古典文學論文集』上、上海古籍出版社、1981年7月。228頁

（4）朱則傑『清詩史』江蘇古籍出版社、1992年2月。247頁

（5）同前。268頁

（6）郭沫若『讀隨園詩話札記』

（7）中野清譯『孔子が話さなかったこと』情況出版、1998年8月。

邦譯には他に以下の三種がある。

邑樂愼一譯　近代支那傳說集『子不語』　長崎書店、昭和十六年八月。

今村與志雄譯『中國古典文學全集』第二十卷。平凡社、昭和三十三年四月。

前野直彬譯『中國古典文學大系』第四十二卷。平凡社、昭和四十六年二月。

（8）http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki

（9）申孟・甘林『前言』13～14頁

（10）實は十二則である。誤植であろうか。

（11）『三十種本新齊諧』の一卷は二十四葉のものが多い。二十一卷以後は、二十一卷二十九葉、二十二卷三十一葉、二十三卷三十三葉、二十四卷二十六葉、と平均より多めであるが、二十三卷が突出している。

（12）『答楊笠湖・附來書』、『小倉山房尺牘』卷七、王英志主編『袁枚全集』江蘇古籍出版社、1993年9月。138頁

（13）『新齊諧・序』

（14）アーサー・ウェイリー著、加島祥造・古田島洋介譯『袁枚―十八世紀中國の詩人』平凡社東洋文庫、1999年3月。167頁

（15）前野直彬『中國古典文學大系』第四十二卷解說。平凡社、1971年2月。514頁

（16）前野直彬『清代志怪書解題』、『中國小說史考』秋山書店、昭和50年10月。303頁

（17）ウェイリー前掲書。305頁

（18）（15）に同じ。513頁